

ほなひ歴史通信

第72号
2014.9.1

「根本正」 顕彰フェスティバルから考えたこと

平成二十五年九月に大子町文化福祉会館「まいん」で、根本正 顕彰会主催の水郡線全線開通八十周年記念フェスティバルが開催されました。映像で見る「根本正の生涯」ビデオ鑑賞のほか、會澤義雄会長の「青少年健全育成の精神と業績」、仲田義一副会長の「水郡線敷設事業の業績」、私の「水郡線開通と大子町の人々」の三つの講演がありました。

私は、「水郡線建設を訴える根本正のもとに集まった人々の間に、大子町、大子地方というまとまりが生まれ、その後の町村合併、農業や商業の発展へとすすんでいく。保内郷、大子町の意識が人々の間に根づいていった。大子町のさまざまな人々が活躍しています。」と、当時の資料、根本正の言葉を紹介しました。

昭和五十八年三月発行の「常陸大子運転区五十年史」で、当時の機関士の古沢藤一郎氏は、「鉄道の開通は明治末期以来、大子地方住民の悲願でした。」「全線開通の当日は晴天に恵まれ、早くから出札口に列ができ、ホームに並んだり、右往左往していた。途中の駅では貨物ホームにむしろや新聞紙を敷いて老人は腰をおろし、若い人達はそのうしろにたつて見物していた。乗客は初乗りをしようとする町村の有志達、先生に引率された小学生達が、一駅ごとに交代していた。」と述べています。また、同じく機関士だった内藤郁三氏は「昭和六年には、失業者三五〇万人を救え、昭

和九年には東北地方の冷害、九州地方の干魃による大飢饉、大陸における支那事変の勃発による不況の波及は大子地方にも大きな打撃を与え、農村の経済更正が強くさげばれていた時代でした。この時期に水郡線が明治四十四年帝国議会で建議以来、幾多の紆余曲折を経て、水戸―郡山間全線開通となり、機関区が開設され一〇〇名を超す職員が転入してくることに、町の人々は大きな期待をいだき、；貸家がつぎつぎと建設され；たことは、鉄道の建設が如何に地方の発展に大きく寄与したか推察される。」と述べています。更に、あとがきには、「五十年を迎えるに当り、創設の昔から今日までのあしあとに想いをいたせば、あの山、あの川、かつての奥久慈の寒村は平和、時に戦争、復興と幾度遷を経て今や自然は遠く立ちのき、世の行くところ舗装された道路網、自動車の激しい往来と、建ちならぶ色とりどりの住宅と大きく変わりつつあります。」と書かれています。

「フェスティバル」で私は、根本正胸像建設事務局の木沢静の資料、根本正のスピーチを紹介しました。当時の資料、当時の声を伝えたいと思っていました。ある質問者は、大子町の小・中・高校を卒業したが、根本正について何も教えられなかったと言います。たしかに、根本正を、那珂町がまず「郷土の偉人」とすべきただという意見が昔からありました。でも、根本正は大子町に、なぜ、これほどの情熱をそそいだのでしょうか。

「フェスティバル」で、仲田副会長の「水郡線の役割とはなにか」、「水郡線をなくしてはならないとの熱弁に打たれました。

昭和五十年代からのマイカー時代、車社会の前に、バスの時代、鉄道の時代がありました。大子駅からのバス路線は、栃木県烏山へ、里美を通って川尻(千王駅)へ、大洗の海門橋へと、たくさんの人を乗せて、行き交いました。「八十周年」を迎える水郡線の大切さを大子町の人々に、訴えていきたいと思えます。

今年も、十二月五〜七日に蒸気機関車が運行されます。(野内)

八溝山地の依上・鹿島マンガン鉱山（二）

笠井勝美

八溝山地のマンガン鉱床は、八溝山地の中生代の深海に堆積した放散虫軟泥が固化したチャート層に貫入して出てきた火成鉱床説が有力である。八溝山地の北から南へ南方鉱山、鹿島鉱山、依上鉱山、高取鉱山、七会鉱山などの鉱山群があった。

ここでは、大子町の山田塩の沢奥の依上マンガン鉱山と、大田原市須賀川にあった鹿島マンガン鉱山についてのみ説明する。両鉱山は鉱石を丸通のトラックを利用して、常陸大子駅に運び、貨車で各地の製鉄所に送られていた。

依上鉱山の産出量は、昭和十八年から閉山までは年八十トン程度だった。鉱区権者は荒井源太郎氏で、昭和二十三年からは更に本格的に採掘が行われた。事務所は塩の沢鉱泉の宿において、鉱員は地元若者を雇い、十名程度であった。

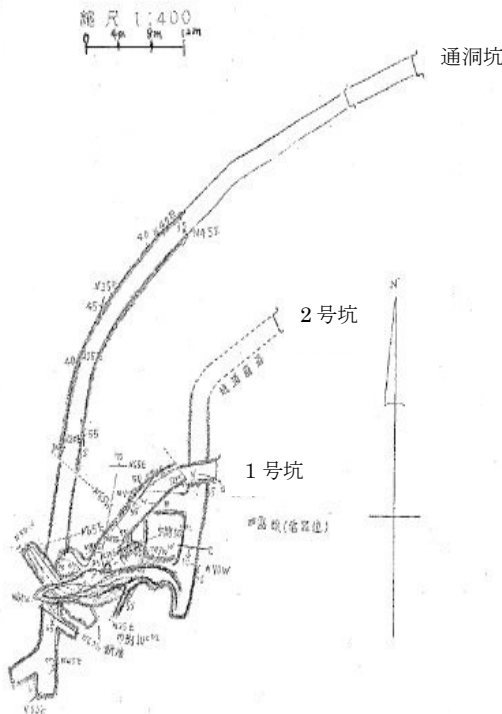
坑道は上から、一号坑、二号坑及び、これより十二・五メートル下位の長い通洞坑から成り立っていた。鉱石は線路を布設し、手押しトラックで運び出した。鉱床は非常に硬く、発破をかけて採掘したが、珍しく地下水はほとんど出なかった。選鉱後のマンガン鉱石はトロッコで現在のふるさと農園の奥まで運び、そこからトラックに積まれた。現在も坑道跡の穴が山の中腹に見ることが出来る。昭和二十三年の鉱石産出量は三〇%マンガンに換算して次のようである。表からは小規模鉱山であることが読み取れる。開山以来の総産出量は七八五トンで、昭和二十六年六月に閉山になった。

昭和23年の産出量

月	t
1	60
2	60
3	30
4	40
5	0
6	0
7	10
8	20
9	40
10	0
11	0
12	0
計	260

24年 産出なし
 25年3月 70t
 25年12月 } 375t
 26年6月 }

依上鉱山坑内図



鹿島鉱山は、栃木県大田原市須賀川横山にあったマンガン鉱山である。昭和十年代頃に鉱区権利者の柳竜太郎氏が開発した鉱山で、その後権利者は屋代徳太郎氏に代わり、十年以上も続いた。この鉱山の最盛期には、男女合わせて三十名もの鉱員が働いていた。坑道の深さは五十メートル以上もあり、地下水の汲み上げや、坑道への扇風機による送風など、毎日の仕事開始までにはたくさん準備があり、手順よく行われて朝は大変忙しい時間だった。坑道は入口から水平に入り、途中から傾斜して深まっており、そこに線路を敷き、トロッコはワイヤーで巻き上げていた。鉱石は女子鉱員によって県道まで運び出した。その後はトラックで常陸大子駅に集められ水郡線で運ばれた。昭和三十年に入り、経営者の屋代氏は、足尾山地のマンガン鉱山にまで手をのばしたが、経営に失敗して閉山に追い込まれたため、鹿島鉱山も閉山した。

鹿島鉱山の総産出量は五千トンにも達する大規模なマンガン鉱床で、北部では花室神社付近までのびている可能性があるが、左貫ではマンガンを掘った記録はない。

（元大子町史編さん委員）

私の太平洋戦争記（一）

野内泰子

開戦

昭和十六年（一九四一年）十二月八日未明、日本軍は、アメリカ太平洋艦隊の本拠地真珠湾を奇襲攻撃し太平洋戦争が始まった。それより十年程前から中国大陸では戦争が続いており、ヨーロッパでもあちこちで戦いが始まり第二次世界大戦の様相は、ずっと以前からあった。日本軍の真珠湾急襲はアメリカをもこの大戦へと巻き込み世界中が戦争へと突き進んで行くことになった。

この時、私は、神奈川県横須賀市浦郷国民学校の三年生だった。この年の四月一日、国民学校令が公布され、小学校は国民学校と名を変えた。当時、私は横須賀市鉾切という所に住んでいた。世界中が戦争へと足音を高める中ではあったが、子どもの私達には、学校名が変わり、教科書の中身が変わっても、特に生活に変わりがあるわけではなく、下校後は、近所の小山や裏の海岸などを遊び場に近くの子どもたちが大勢集まって、夕方、母親たちの迎えの声を聞くまで遊びに夢中になっていた。

ところが、この朝七時、日本放送協会のニュースで（当時ラジオ放送はNHKしかなかった）伝えられた真珠湾攻撃は、日本中を驚かせた。テレビのある時代ではない。ラジオは本以外の楽しみの一つだった。現在、総合テレビで放送中の「花子とアン」の花子、村岡花子の「おはなしおばさん」の時間も楽しみだった。とはいえ、この当時、各家庭にラジオがあったわけではなく、ラジオを聞くためには、高いアンテナを張らなければならず、外から見てもこの家にはラジオがあると分かったものである。我が家のラジオは高い柵の隅に置いてあり、スイッチを入れるのは父か兄で、背の低い私には、踏み台に乗っても手が届かなかった。

戦争に突入したことが放送されると、学校での会話も突然変わった。先ず、次の朝、仲良しの友達Kさんが新聞の切り抜きを持

ってきて、大声で何か話し始めた。クラスの友達みんなKさんの周りに集まって行き、何事かと机の上をのぞき込んだ。そこには、アメリカ大統領のルーズベルトの顔写真の切り抜きがあった。Kさんは、これが戦争を起こした大悪人だから、みんなで作ってやろうといい、鉛筆の先で写真を突っついてみせた。周りにいたみんなも「そうだ、そうだ」といつて次々に顔写真に穴を開け、遂には無残な写真になった。

Kさんは、クラスの中でも飛び抜けて頭のいい人で、その年女学校に入学したお姉さんと一緒に夜まで勉強をしていると言っていたが、いつもは、穏やかな人でそんな過激な行動をとるような人ではなかった。しかし、芯は勝ち気だったのだろうか。戦争に突入したという異常事態に、日頃の彼女からは考えられないような行動を起こしたのかも知れない。とにかく、その日のことは、今でも私の心に衝撃的な事実としてはっきりと残っている。

日本軍 南方への進撃

昭和十七年四月、私は四年生になった。その頃になってもまだ、戦争が行われているという意識はあまりなかった。月に一、二回は家族揃ってデパートに行ったり、その近くの三笠（日露戦争当時の連合艦隊旗艦、横須賀市白浜海岸に固定保存されていた。今でもそこにある）を見学したり、時には、金沢八景や金沢文庫（横浜市の南端にある鎌倉時代からの景勝地。我が家からも近かった）などへピクニックに行ったりした。まだまだ長閑な日常であった。

この頃は、戦場がずっと南の海上にあり、まだ、切実感はなかった。しかし、戦争が行われているのも事実で、日本軍は、シンガポール、香港、グアムを攻撃、やがて、香港を占領、マレー沖海戦では、プリンス・オブ・ウェールズを撃沈。ルソン島上陸、マニラ占領と破竹の勢いで南方へと手を伸ばした。（次号へ続く）

（大子郷土史の会）

小久慈のつり橋と金砂山の石灯籠

会沢晴美

つり橋

その昔、袋田村北田氣と大子町小久慈間は架橋がなく、渡河や渡舟にたよっていた。出水の際は運送に大きな支障を来していたが、袋田村長と大子町長が県に陳情し明治三十六年(一九〇三)八月に橋の完成をみた。

当時の写真を見ると、西洋の絵にあるようなすてきな木のつり橋である。現在は、コンクリートの基礎石が残っているのみである。つり橋の長さ五六間、幅三間、高さは水面から四間四尺で、一万六千円の工費を要した。このつり橋の設計は一般公募され、それに応じた人は、諸沢出身の大高巳之次郎さんである。当時の水戸の建設会社の技術担当をしていて、彼が設計したものが採用された。そして、大子の工事現場近くに泊り込んで工事の監督をしたという。

私は、このつり橋を見ることも、渡ることもできなかったが、小久慈に住む老人は少年時代(昭和五年頃)渡り歩いたという。昭和七年、現在のコンクリートの小久慈橋ができるまで、明治・大正・昭和初期まで長期にわたり皆の役に立っていたのだ。流れる川の水の中に橋脚を造るのは当時は容易ではなかったもので、つり橋が考えられたのだろうか。 ※大高巨氏のお話を参考にしました。

石灯籠

諸沢に隣接する旧金砂郷村の断崖絶壁の山上に西金砂神社が鎮座する。本殿の前に、嘉永五年(一八五二)歳次壬子冬十一月十二日に奉納された常夜塔(石灯籠)が対になって建っている。

正面には「越後」の文字と側面には「知野庄兵衛 鶴巻久次郎 松永卯七 川口惣衛門 関金六 今田庄吉 関仙左衛門 松永浅七 川口栄次郎 関弥吉」ら越後商人十名と地元「世話方 木

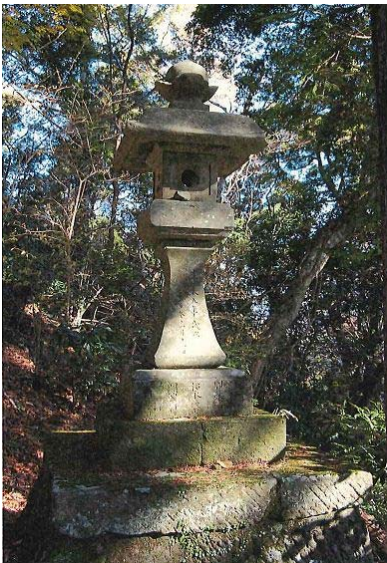
村小八郎 同 中嶋藤衛門 石工 渡辺半□□」ら三名の名前が刻んである。川口惣衛門は私の祖父の二代前の先祖である。なお、松永浅七は袋田の桜岡源次衛門が越後の加茂に潜伏した時世話した松永朝七ゆかりの人物だろう。この中嶋藤衛門は、菟藟の神様の曾孫にあたる。

なぜ、金砂山中に、遠い北国の越後商人が奉納し、名前が刻まれた石灯籠があるのだろうか。越後加茂の主要な産物に元結がある。髪の毛を結び束ねるのに用いる紐である。亡父は「加茂の生家は元結づくりで復活した」と言っていた。

元結は、和紙を糊でひも状にする。米や小麦の糊では、水気に触れるとふやけて用途に耐えられない。これに対して、菟藟を入れた糊は、多少の水気や水につかっても使用に耐えられる故に、越後加茂の元結の産地では、菟藟は欠くことのできない材(原料)であったのだ。

この金砂の山中に、越後加茂の商人と常陸国諸沢村の中嶋藤衛門の名がある理由であると思われる。現在は、お相撲さんや役者の髪結いに使われるだけであるが、昔は、元結は、日常生活に欠かせなかったという。金砂神社の石灯籠から、父の言葉を想い出すことができた。

(常陸大宮市在住)



西金砂神社の石灯籠

保内の農民騒動(下)

二 家毀し

高橋裕文

太田村では田中源藏、国分新太郎らの暴力的な金策に対して、元治元年(一八六四)七月十五日水戸城下から役人が出張したため村内が一時鎮静したが、城下「大変」のため水戸へ役人が引き揚げると、村内では再び浪士が乱入してくるといいうわさが広がり人々は動揺した。二十七日、村内一統が竹槍を持ち辻々をかため、浮浪の徒を一人捉えた。さらにその夜、その者を取り返しに來たとと思われる三人を捕えた。村役人が調べたところ、この者たちは先の浮浪の徒の身内の者で取り返しに來たのではないとわかり居村へ引き渡そうとした。ところが百姓たち約一〇〇〇人は組頭立川次衛門(問屋立川雄介)、組頭小沢惣次衛門など一三軒の宅に押し込み家財、建具、敷物などまで残らず打ち破った(文久四年太田村御用留)。これは、一三軒の者たちが野口館、小菅館よりの金子徴発の手引きをし太田村へ難儀をかけたという理由からであった(『水戸藩史料』)。

七月晦日金砂山で上宮内、上利員、下利員、山方、葉谷村の農民たちが、槍、鉄砲をもって蜂起し、大宮村鈴木弥三郎や南発人宅を打ち毀し、さらに山方村根本正之介、清水、盛金村庄屋、西金村小室吉重郎、小室兵重郎、河合伴次郎、頃藤村館まで打ち毀した(『文明ニ懸ル旧新諸雜誌』)。

太田村の北、天下野村辺でも七月晦日農民が立ち上がった。天下野村など七か村の農民は大勢で小菅郷校に押し寄せ文武館武場を破却し、徳川斉昭の「告志篇御影あふき」まで引き散らすなどの乱妨をし、ついには焼き払った(瀨谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』)。

この小菅郷校には七月八日太田村より移動した国分新太郎組が駐

留して金策を行っていた。この打ち毀しには小里郷の者は一人も加わっていない、小里以外の村々より乱入したものであるという。打ちこわしの頭取は天下野村の政之允、御館(郷校)こわしの頭取は中染村の八郎兵衛、佐十親子、町田村の庄屋兵衛門親子であるという。さらに、天下野村辺の農民たちは生瀬郷へも押し寄せてきた。八月中、町田村の後藤吉兵衛、同条之介、天下野村木村政次衛門は頭取として手勢を大勢召連れ、生瀬郷へ家毀しをかけた。その時佐川弥次衛門、国谷貞蔵も同様の働きをしたという(益子家「明治二年御用留」)。

まず、八月一日夜、高柴村庄屋益子喜衛門の家が毀された。喜衛門は南発していて伴の英次郎が留守をし父のかわりに「御用向取計罷在申候」としていたが逃亡した。同夜、内大野村組頭も逃亡し奥州へ行き潜居した。また同村の庄屋飯村平蔵は六月二十四日に郡奉行の供として南発し、小金まで行き歎願をしていたが、父病死のため七月八日帰村し、忌中後、再び南発しようとしたが八月二日に家毀しが押し來たので逃亡した(益子家「慶応四年御用留張」)。また、小生瀬村の山横目石井重衛門(扱村は下野宮、上高倉、下高倉、天下野、中染、東染、西染、町田の八か村は南発せず「国元鎮撫取締役」(「勤王殉国事蹟」)として残っていたが、家毀しされ品物が盗み取られた。また小生瀬村の金沢惣七郎も南発していたがその家は焼かれようとしたらしく「家宅ヲ為焼立候評説も御座候」とある。

さらに、小生瀬村庄屋大藤伝五兵衛も小金表へ南発していたが「家屋未チンニ打破」られたため、その後、妹多加が「大家之身代」を一人でささえた(明治二年御用留帳)。小生瀬村の家毀しの頭取は佐川弥次衛門であった。隼之介は佐川弥次衛門の手先で家破りでは先手廻りをつとめた。

生瀬郷の家毀し勢は八月三、四日には小里方面に進出する。

(元大子町史編さん委員 那珂市在住)

新聞記事にみる満州移民の断片(二四)

—第九次冷家店大子町開拓団の軌跡—

昭和十六年七月四日付「いはらき」新聞紙面において大子町開拓団の当時の農業事情を報告した菅井正維記者は、記事の末尾を次のような感想で締め括っている。

「大子開拓団は未成品であつて今後に期待さるゝ成果であるが、恵まれた環境と団長の指導力が今日の如く変らぬ以上その成果は期して待つべくその勤労精神に築かるゝ点においては遠からず全開拓団中の高座を占むるであらうと想像する、開拓団の常として大子分村にも不自由さは多々ある、然しながらそれは将来の殿堂に対する樂しき「忍従」である。／＼記者の観点を以てすれば本県の指導者はこの大子開拓団に対して認識が足りず聊か継子扱ひの風情がある、それは本団に対する県庁からの視察が我等と相会した磯部君を以て嚆矢とし尚公式視察者として県人関係者は記者が嚆矢であるとのことである、それだけ県は本団を再認識し県民に呼びかける必要があらう、県自身が力を入れた開拓団よりも我大子開拓団の方が将来成果を挙げ得た場合、県の面目は如何であらうか」と。

開拓地での農業経営と日本のそれとの間には想像以上の「違い」があることを踏まえ、菅井記者は「本団の作業その他には幾多のナンセンスがある」と表現し、また農事指導員の斉藤良治も「宿題」と認識し深い戸惑いをみせていたことは本誌前号で指摘したが、そこに起因する様々な「不自由さ」を「それは将来の殿堂に對する樂しき「忍従」である」と評している点に着目したい。「全開拓団中の高座を占むるであらう」との展望ともども、極めて樂觀的としか思えない指摘である。「満洲国総務庁の招請」による実情視察の報告の一部である点も勘案しなければならないが、「大

東亜共栄圏の枢軸をなす満洲建設」(昭和十六年七月五日付「いはらき」新聞記事中の菅井記者の表現)の方策に同調し、推進役でもあつた當時の新聞論調の一つの表われともいえよう。

菅井記者が担つたもう一つの任務は、満洲建設勤勞奉仕隊の実情視察である。その報告は、同年七月十日付「いはらき」新聞に掲載された。当時、大子開拓団に送り込まれていた勤勞奉仕隊は、菊田光正(水戸市三の丸青年校助教諭)隊長、郡司久治(那珂郡菅谷村会議員)副隊長ほか県内各地から選ばれた一〇名の隊員から成つていた。隊員には、大子町浅川出身者も二名含まれていた。期間は、六月初めから八月中旬頃までの約二か月余にわたる短期の勤勞奉仕であつた。「元來奉仕隊員は原則として一集団四十名を以て組織するに拘らず、こゝばかりは前記の通り僅十二名が一隊を成し四十名分の働きをなすといふ衝天の意気を示し、この少数隊を以て大子開拓団の作業を側面から掩護してゐる」(十六年七月十日付「いはらき」新聞)状況を、菅井記者は視察したことになる。

白取道博氏の研究(「満洲建設勤勞奉仕隊」に関する基礎的考察)によると、昭和十四年五月の「満洲建設勤勞奉仕隊要綱」の策定をもつて制度が動き出す。その「方針」には、「現下ニ於ケル満洲建設ノ重要性ニ鑑ミ日滿共同防衛ノ見地ニ基キ満洲ニ於ケル食糧飼料ノ増産日本ニ對スル豊富且低廉ナル飼料ノ供給並ニ國防建設ニ寄与スルヲ爲ス後青年ヲ動員シ満洲建設勤勞奉仕隊ヲ編成セシメ主トシテ国境地帯及其ノ背後地並ニ開拓地等ニ於テ土木、農耕其ノ他ノ建設事業ニ勤勞奉仕セシムルト共ニ併セテ日本農村問題特ニ飼料問題解決ノ一端ニ資ス」と記された。さらに翌十五年二月には「満洲建設勤勞奉仕隊派遣要綱」が策定され、この内容が四月十二日付文部次官・農林次官・拓務次官連名通牒「満洲建設勤勞奉仕隊ニ關スル件」をもつて地方長官に伝えられた。かくして、「銃後青年を動員シ」、その労力を満洲における開拓政策の促進に充当する仕組みが始動するのである。

(齋藤)

百年前の大子を行く (三)

大金祐介

「百年前の大子を行く」では、初回到呉服店を、二回目に雑貨店を取り上げた。三回目となる今回は、これまでとは少し趣向を変え、「主なる商店の営業振り」という題の新聞記事を取り上げた。これは、明治四十三年三月二日付けの「いはらき」新聞に掲載された大子町紹介記事「大子号」(三六面)を構成している記事の中のひとつで、明治四十三年当時の大子の商業や商店の様子を紹介している。今回は、「主なる商店の営業振り」の全文を引用し、そこに登場する商店を紹介することで、明治四十三年当時の大子の商業や商店の様子に接していただきたい。尚、以下の引用文中①～⑩は筆者が加えたものである。

●主なる商店の営業振り

大子町の各商店の牛耳を執つて居るのが外池、樋口、三河屋、吉見屋、助川独立勸工場などで ▲①外池は近江屋号の看板を掲げて呉服洋物肥料あらゆる商品の無いと云ふ事は無い 最上醤油金鶏印もこの外池商店の醸造部より売り出されて千葉県下の醤油と拮抗して声価を博して居る 肥料部は又た保内郷の地に適合せる人造肥料を販売すべく日本人造肥料会社と特約して外池商店の商標「丸越」印配合肥料を売り出して居る 呉服部は斬新なる珍柄を取り揃へて価格も廉なりとの評判 ▲②樋口商店は金物、肥料、運送、荒物の四部に営業を区分し各々盛大なる商ひ振り 大子煙草組合の肥料は同店の一手に販売を引受け着実に信用を博して居る ▲③樋口呉服店は同家の呉服部とも云ふべく新店だけに業務に大勉強 ▲④三河屋呉服店これ又た蓄音器を備付けて山間の御得意さまにヤンヤと受けて居る 大子の三大呉服店を東京市の其れに對

照すると外池呉服店は三越式で樋口呉服店の松屋三河屋呉服店の白木屋と云ふ塩梅である 従前は呉服物と云へば遠く馬頭や黒羽又たは那珂郡の山方ならねば買はぬもののように思つて居つた保内郷人士が昨今は呉服物は大子に限るやうになつたのみならず馬頭黒羽方面よりも続々得意を吸収して居る つまり同業者が産地と特約して新柄を格安に仕入薄利主義に商つて居る結果なのである ▲⑤助川独立勸工場は名の如く助川氏の独営でこれぞ不足といふものなく買う人には至極便利な店 雑貨商の ▲⑥吉見屋商店は土地生ぬきの店 薄利でお客さまの厚意に報ゆるとは主人の主張である ▲⑦齋藤運送店は如何 物産の主なるもの一手輸送の引受けをなし親切に取扱はるるので荷主の信用を博して居る 粉菫問屋は四五軒あるが⑧川口、⑨松浦、⑩山りが主なるもので粉菫問屋の営業は金貸兼業で種芋の植付け時に資金を貸与し製品で元利を回収するので利益としては一番ある 従つて店構えも立派で何れも大商店

① 近江屋号外池商店 (店主・外池重次郎) は、金町 (現・器而庵) に店を構えていた。天明初年に近江商人の外池家が経営する一店として開店した。同店は、呉服太物、肥料、度量衡器などの小売、醤油醸造業、塩の元売捌などを手がけていた。

② 樋口本店 (店主・樋口與平) は、泉町 (現・旧セラヴィ) に店を構えていた。創業は明治三年である。同店は、金物、肥料、荒物、米穀などの小売、蒟蒻、楮の取引、貨物運送業などを手がけていた。また、各種ブランド商品の特約販売店や大同生命保険の代理店になっていた。

③ 樋口呉服店 (店主・樋口佐平) は、泉町 (現・旧筑波銀行大子駅前支店) に店を構えていた。同店は、明治二十四年に樋口本店の呉服部として創業し、明治四十年に樋口呉服店として独立した。呉服太物のほか、雑貨や小間物などの小売を手がけていた。

④ 三河屋商店 (店主・雫虎吉) は、泉町 (現・旧マルス魚店) に店を構えていた。呉服太物や荒物などの小売を手がけていた。販売促進に蓄音器を用いたことで知られていた。

⑤ 助川百貨店 (店主・助川作次郎) は、金町 (現・大子ゼミナール) に店を構えていた。創業は明治二十七年である。同店は、雑貨、小間物、陶漆器、金物、玩具などの小売を手がけていた。座売りが主流であった時代に陳列販売を取り入れたことで大変な好評を博していた。系列店に助川分店 (後の大内団扇店) と助川呉服店 (袋田駅前) がある。

⑥ 吉見屋商店 (店主・大金仙之介) は、金町に店を構えている。創業は明治二十三年である。同店は、現在は衣料品店になっているが、明治四十三年当時は荒物雑貨の卸小売を中心に、煙草、履物、小間物、石油、醤油などの小売を手がけていた。このうち、石油と醤油は、ニューヨーク・スタンダード石油会社と野田醤油株式会社の特約店として販売していた。系列店に吉見屋分店 (後のヨシミヤレコード) がある。

⑦ 松屋運送店 (店主・齋藤百之介) は、金町 (現・丸三酒店) に店を構えていた。荷馬車による貨物運送業を手がけていた。

⑧ 川口商店：大子には、川口利吉を店主とする川口商店 (金町・現・わかまつ歯科) と川口利作を店主とする川口商店 (金町・現・榎材木店) の二店があった。いずれも蒔莨商だった。記事中の「川口」がどちらを指しているのかは分からない。

⑨ 松浦商店 (店主・松浦栄次郎) は、金町 (現・松浦駐車場) に店を構えていた。同店は、蒔莨商で、京都の山添商店の蒔莨仕入店として創業し、後に松浦商店として独立した。

⑩ 山り：家印を読んだもの。前後の文脈から大子の蒔莨商の中の一店であると思われるが、手ごかりが家印だけであるため、詳細を調べるできなかった。

(筑波大学人文・文化学群人文学類三年)

編集後記

今年の七月十八日に旧上岡小学校と旧黒沢中学校が国の登録有形文化財へ登録の答申が出ました。旧上岡小学校は現在、朝の連ドラ「花子とアン」の花子の母校のロケ地となりました。また、休日は保存会の方々の協力により一般開放され、沢山の観光客が訪れています。

旧黒沢中学校は昨年の三月に閉校になったばかりです。沢山の卒業生に愛され、現在まできれいに管理・保存されてきました。

昨年度の「常陸大子のコンニャク生産用具及び加工用具」の国登録有形民俗文化財登録に続いて、大子町で国の登録は三件になりました。現在、茨城県自然博物館 (ミュージアムパーク) の「新茨城風土記―ひとと自然のものがたり―」という企画展で、この「常陸大子のコンニャク生産用具及び加工用具」の登録有形民俗文化財の一部が十一月二十四日 (月) まで展示されています。その他にも大子町の特産物や伝統工芸の紹介もされています。今後も町の宝を大切に保存し、町の文化遺産を活かしたまちづくりを目指していきたいです。

(家田)

編集 大子遊史の会

編集人 齋藤 典生 (茨城大学教育学部特任教授)

野内 正美 (茨城県立歴史館資料調査員)

齋藤 仁司 (大子町教育委員会)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館

☎ 0295 (72) 1148